

10月の植物

ヌルデ（別名フシノキ） ウルシ科

Rhus javanica L. var. *roxburghii* (DC.) Rehder et Wils.

ヌルデの名はかつてこの木を傷つけると白い樹液が出て、これを塗料として使用したこと（塗り手）に由来するとされています。ヤマハゼやヤマウルシなど他のウルシ科植物とは葉軸に翼があることと葉に明確な鋸歯があることから区別されます。

10月頃、小葉と小葉の間をよく観察すると虫コブを見ることが出来ます。これが生薬の「五倍子」。これはアブラムシ科のヌルデノミミフシが4月下旬頃若芽に卵をうみつけ、この刺激により組織が耳状にふくれて袋状のゴールができます。1個には4000匹ものアブラムシがいるとされ、この成虫がオオバチョウチンゴケで越冬し春には再びヌルデに集まり産卵するという訳です。オオバチョウチンゴケは湿地を好みますので五倍子を探すには水辺の近くのヌルデの木を観察するのがよいでしょう。



かつて、黒髪山で大量の五倍子を見つけ、これを家に持ち帰りそのままにしていたら、翌朝あちこちアブラムシが這い出て往生したことがあります。保存するには湯通しあるいは蒸して乾燥することを忘れていました。五倍子は多量のタンニンを含み、消炎、止血、抗菌剤として重要な医薬資源であると共にかつての既婚女性のお歯黒の原料（煎じ汁に米の研ぎ汁と鉄片を加えたもの）として菌の増殖と口臭を防ぐエチケット素材として利用されていました。また、最近では少なくなったブルーブラックインクの原料でもあります。

10～11月、雌株の果実は黄褐色に熟し、表面に白い粉が目立ちます。これはリンゴ酸カルシウムで舐めると塩辛いことからシオカラノキ、シオノミ、ショッペノキの方言があり、昔、北海道の内陸に住むアイヌ民族はこれを塩の代用にしていました。今では慢性、急性腎炎の方は塩分控えめですから、この白い粉を料理の味付けに利用できないかと考えています。

ヌルデは平地から低山に極普通の植物ですので果実の白い粉を舐めるのもよし、またよく観察して五倍子を探してみたいかがでしょうか。 （野中源一郎）



五倍子



果実